

秘封倶楽部と行く恐怖 の旅

タミ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

秘密を暴く者たち、その名は宇佐見蓮子とマエリベリー・ハーン。不思議な目を持つ彼女らは、秘封倶楽部、というオカルトサークルに所属している。2人は、いつものようにオカルトスポットの調査に出かける。だが、2人はまだ気付いていなかった。これから彼女らに、本当の恐怖が襲いかかることを……。

皆様、おはこんばんちは。タミです。え？「世界を救ったサイヤ人が幻想入り」はどうしたんだこの野郎、つて？……はい。すいません。やってみただけです。戦

闘シーンが多いあの作品にはない、謎解きホラー、みたいなのを書いてみたかったの
で……。この作品は不定期更新です。気が向いたら書く、ということにします。もし
かしたら、「世界を救ったサイヤ人が幻想入り」とコラボするかもしれません。それで
は、ゆっくり読んでいってくださいね！

目次

第1章(という名の最終章) i b編

a c t. 1	秘封とゲルテナ		1
a c t. 2	3つの薔薇		15
a c t. 3	うっかりさんの物語		
			27
a c t. 4	深層		40
a c t. 5	メアリー		65

第1章（という名の最終章） i b 編

act. 1 秘封とゲルテナ

「はあっ……はあっ……やばい………っ、マジでやばい………っ！」

2118年、京都。遷都によつて東京から移された首都である。この平和な都市に、走る女性が1人。

彼女は何か追われるように、また取り憑かれたように何処かに向かつてひた走る。

「もうちよつと………！うおおっ！！燃えろーっ！私の何かーっ！！」

（昨日寝付けないからつてイライラして目覚まし時計ぶん投げて壊したのがいけなかつたんだー！ちくしよー！）

そんなことを考えながら女性は大通りの曲がり角を曲がる。

そして、ある喫茶店の前で右足を出して急停止する。

「ぜえっ……ぜえっ……」

女性は汗だくになり息を荒げながら喫茶店「ごらど」のドアを開く。

「ふうっ、着いたっ！！」

「着いた、じゃないわ蓮子。37分の遅刻。……何か言うことはないのかしら？」

ブロンドの髪の少女はぶすくねながら蓮子を叱責する。

「いやあ、ごめんね……目覚まし時計が……」

「言い訳しても駄目。まったく……それに、あのフザけた留守電の件、許してないのよ」
「まあまあ、パフェでも奢ってあげるからさ、機嫌直してよメリー……」

そう言つて蓮子はメリーの向かいに座る。

彼女らは宇佐見蓮子とマエリベリー・ハーン。蓮子には“メリー”という愛称で呼ばれている。

二人で秘封倶楽部というオカルトサークル活動をしている。

しかし、彼女らは除霊や降霊などということはせず、結界暴きなどをしているため、不良サークルと呼ばれてしまっているのだ。

彼女らは彼女らの通う大学でも悪い意味で有名である。

今日も蓮子がメリーを呼び出したのだが、当の蓮子が先程説明されたように、37分も遅刻したのでメリーはご立腹なのだ。

時刻は10時37分。集合時間は10時なのだが、蓮子が起きたのはなんと10時17分である。

「にしても、……って古い喫茶店よね……今やつてるアニメって100年くらい前のでしょ？進んでないわねえ」

蓮子を出されたコーヒーを飲む。

「名前も知らないアニメね。画質も古いし。空を飛ぶのかあ……男の子が好きそうなアニメね。……ところで、今日はなんで呼び出したの？また結界？」

「ふふん、今回は違うのだ！」

メリーの問いに、蓮子は自慢げに一枚のチラシをテーブルにばん、と叩きつける。

「なにこれ？美術館の特設展の案内……ゲルテナ展？」

メリーは意外そうな顔をして蓮子を見つめる。

「そ。最近色んなところ行ってきたでしょ？だからたまにはこんなのもいいかなーってね」

「へえ……蓮子にしては意外な提案ね」

「でしょー？……ん？にしては」とはなによかにしては」とは

「自分の胸に手を当てて考えてみなさい」

メリーは冷たく言い放つ。

「ま、いいや……ほら、はやく行こうよ！」

蓮子はわくわくしながら席を立つ。

「行くのはいいけど、今回は全部蓮子の奢りね。美術館のも」

「……………え？」

蓮子は思考を止めてしまう。

「そりやそうでしょ。これで通算299回目の遅刻よ」

「数えてんのかよ……」

蓮子は苦笑いを浮かべる。

「とにかく、今日は罰としてです！いいわね」

「……そんなぁ……私の貧乏がマツハ……」

蓮子はガツクシと肩を落とす。

「さあ、着いたわよ。……イヴは美術館は初めてよね？」

「うん」

「今日観に来たのは「ゲルテナ」って人の展覧会で、絵のほかにも、彫刻とか……色々と

面白い作品があるらしいから、きっとイヴでも楽しめると思うわ」

美術館に、3人の人が訪れてきた。小さな少女、イヴに、彼女の母親らしき人物が話している。

「受付、済ませてしまおうか」

「そうね。あとパンフレットももらいましょう」

イヴの父親がそう言つて、3人は受付へと足を運ぶ。

「……………先に観てるね」

ふと、イヴが母親に話す。その言葉に、イヴの母親は少し驚いたような表情を見せる。が、すぐに頷いて、

「もう、イヴったら仕方ないわね。いい？美術館のなかでは静かにしてなきや駄目よ……………まあ、貴女なら心配ないと思うけど…他の人の迷惑にならないようにね」

イヴは大きく頷き、ゆっくりと歩き出す。

「……………2階から見て回ろつと」

イヴは胸を踊らせながら、ゲルテナの世界へと足を踏み入れていった。

ゲルテナ展、二階。ここに、蓮子とメリーが並んでゲルテナの作品を鑑賞していた。「つたく、なんで私が2人分の入館料を払わねばならんのだ」

蓮子はぶつぶつと文句を言いながら歩く。

「37分」

「はいはい、私が悪うございました」

蓮子は諦めたようにため息を吐く。

「ところで、起きたら泣いていたってどういうことなのよ」

「もういいよその話は…でもなんか今朝はすんごく長い夢を見てみたいで…起きたらボロ泣きしてたのよねー…」

「…1回診てもらったら？ストレスが関係してるとかどうとかがってネットにもあるけど」

蓮子もストレス溜めるのね、とメリーは付け加える。

「一言余計だっつの…」

聞こえていたのか、蓮子はぼやいた。

「それにしても、ゲルテナって色んな絵とか彫刻を造っているのね」

メリーは周囲を見回す。

「ほらメリー、こっちだよ」

すると、蓮子が急にメリーの手を掴み歩いていく。

「ちよつと、蓮子！急に何よ?!」

「ふふん、私がこの美術展に来た本当の理由を教えてしんぜよう、メリー君！」

蓮子は怪しげにニヤツと微笑む。

「この美術展、神隠しが起こるって噂よ。人気の少ないところに展示されている絵に、引きずり込まれる……っていうね」

蓮子の説明に、メリーはやつぱり、と顔を覆う。

「蓮子のことだから何か裏がある、と思ったけど、やつぱりそんなのだったのね」

「そんなのとはなんだ！私は100年前のあの事件の真相に辿り着くまでこういうの止めないからね！」

蓮子は頬を膨らませ、ずかずかと進んでいく。

「……………まったくもう」

メリーは急いで蓮子の後を追う。

「わあ……………大きな絵……………」

イヴは大きな絵の前に立ち尽くしていた。その絵のタイトルは、「絵空事の世界」。絵空事とはありもしないこと、などの意味がある。その絵には、ここと同じような美術館

のような光景が広がっている。そこに飾られている絵は、イヴも見覚えのある、このゲルテナ展に展示されている絵が沢山あった。

「……………なんて読むんだろう？……の世界……………」

「それは絵空事の世界って読むんだよ」

ふと、背後から声をかけられ、イヴは振り返る。

すると、帽子を被った黒髪の女性とブロンド髪の女性が立っていた。そう。蓮子とメリーである。

「えっと、お姉さんたちは？」

イヴは若干の懐疑心を抱きながら問いかける。

「私？私は宇佐見蓮子…で、これはマエリベリー・ハーン。メリーって呼んで」

「これとはなによこれとは」

メリーはジト目で蓮子を睨む。

蓮子は苦笑いをして、

「まあまあ、そう邪険にしなさんなって、あはは…」

すると、館内の照明がチカチカと点滅する。

「ん、電気が…………？」

蓮子たちは、照明に釘付けになっていた。すると、今まで少しざわざわしていた館内

が急にしん、と静まりかえった。耳をすませても、人の話し声が全く聞こえない。

「あれ、こんなに静かだったっけ？」

イヴは謎の変化に言い知れぬ不安感を抱き、身を縮こませる。

「まあ、静かに越したことはないけどね！」

「ブーメランが刺さってるわ蓮子」

「え？ブーメラン？刺さってないよ？」

蓮子は自分の身体を見る。

「……………あなたが一番うるさかったってこと」

メリーは小声で呟く。

「ま、さっさと神隠しの真相を暴いて帰るわよ……メリー。つと、その前に……………ねえ。貴

女、名前はなんていうの？」

「……………イヴ……………年は9歳です」

「イヴちゃん。今日は親御さんと一緒？」

蓮子の問いにイヴは無言でこくり、と頷く。

「んじゃあ、早く親御さんのとこに戻りな。迷子になるよ」

蓮子はイヴの頭を撫でる。

「……………ねえ蓮子、周りを見て……………こんなに人少なかったかしら？」

「ん、確かに……………少ないわね……………いや、ひとつこひとり居ない……………一体何故……………？」

すると、今までついていた灯りが突然消える。

「な、電気が消えた?!」

これには、流石の蓮子も困惑しだす。

「うう……………」

イヴは蓮子のスカートにしがみつく。

無理もないだろう。急に電気が消え、周りの人たちの気配や声が聞こえなくなったのだから。

それに加え、今まで自分を助けてくれて、一緒だった父や母の姿も見えない。

そんな状況が寄つてたかつてイヴの精神を痛めつけている。

「どうしよう蓮子、こんなの初めてよ……………？」

「うーん、まずは一旦外に」

外に出よう、蓮子がそう言いかけた途端、何かが滴り落ちる音が聞こえた。

3人がその音の出る方を見ると、何か青いインクのようなもので文字が書かれていた。

「……………」 したのかいにおいでよれんこ、めりー、いづ。ひみつのばしょ、おしえてあげ

る”…………?”

その文章を読み、3人は硬直する。

「……………何よこれ」

「わからないわね。とりあえず、一階に降りないと出られないし、降りましょうよ」

メリーの提案で、ひとまず一行は下の階、一階に降りることにした。

「ねえ、蓮子。あの絵……………境界が見えたわ」

メリーは蓮子にのみ聞こえるように耳打ちする。

「え？絵に境界が見えたの？……………うーん、わかんないな…取り敢えず今は下を指そうよ」

3人は、階段に向かって歩みを進めていった。

「さて、降りてきた……………、さあ、さつきと出るとしますかね」

蓮子は速歩きで出入り口へと向かう。

「ん…………?こんなドアノブ付きのドアだったっけ?……………まあいいや」

蓮子はドアの形状に若干の違和感を感じながらもドアを開けようとノブを回そうとする……………が。

蓮子がノブに触れた途端、ノブがポロつと取れてしまった。

「……………えええーっ?!?ドアノブ逝ったあああーっ?!?!」

「ちよっ、何してんのよ蓮子?!」

「いや……………軽く回そうとしただけなのに……………」

蓮子は若干涙目で言い訳をする。

「どうしたんですか?蓮子さん、メリーさん。」

イヴが心配そうに2人を見つめる。

「……………ごめん…出られなくなっちゃった」

「……………えっ?」

イヴはつい抜けた声が出てしまう。

「……………こうなったら、さっきの青い文字の誘いに乗ってやろうじゃない!」

蓮子は冷や汗を滲ませつつも決意のこもった眼差しをメリーとイヴに向ける。

「……………それしか無さそうね。それじゃあイヴちゃん、これから先は何が起こるかわからないわ。だから、ここで待ってて」

メリーは蓮子に少し呆れながらイヴに待つように言うが、イヴはふるふると首を横に振る。その華奢な身体は、小刻みに震えている。

「あの、私も、私も行きますー！」

イヴは震える声でなんとかその言葉を絞り出す。

「……………ほんとにいいの？ 私たちも貴女も守ってあげられないかもしれないよ？」

蓮子の問いかけに、イヴは首を縦に振る。

「よし、それじゃあ、その秘密の場所つてのを探してみますか。」

「……………これかな？ 不自然に柵が切れてる」

蓮子は1つの絵に目をつける。

「深海の世……………ねえ」

メリーは顎に手を当て、考える仕草をする。

深海の世。地面に描かれた絵で、そこには深い青が広がっていた。

その青は、水面のように揺らめいているようにも見えている。

その青の中に、鮫鰐のような巨大な魚がいた。

瞳孔が無い死んだ目を携え、悠然と佇んでいる。

まるで侵入を阻むかのように蓮子たちを睨んでいる。

「まあ、進むしかないなら、進むだけよ」

3人は、絵の中へゆつくりと入っていった：

a c t . 2 3つの薔薇

「雰囲気が変わった……」

深海の世の下は階段のようになっており、そこには青いインクをぶちまけたような真つ青な世界が広がっていた。そこには、美術館には無かった絵もある。

「水の中……ってことなのかな？」

「うーん、わかんないわね……」

蓮子とメリーは小さく会話を交わす。そして2人は、一つの絵に目がいった。

「……………」
「幾何学模様の魚」
「ねえ……」

「あれって「きかがく」って読むんだ……」

イヴは蓮子の独り言を聞いて絵のタイトルの読み方を知ったようだ。

すると、メリーが2人に声をかける。

「ねえ、扉があるけど……」

メリーが指差した方には、景色とマッチした水色の洋風な扉があった。

「……………」
「ダメね。カギかかっている」

蓮子がドアを押し引きするがドアはビクともしない。

「んじゃあ、反対側でも探してみろ？」

「カギがあればいいんだけど……」

蓮子とメリーはサツサと反対側に歩いて行ってしまった。

「……あつ、待つてくださいい！」

しばらく「幾何学模様の魚」を見ていたイヴは慌てて2人についていった。

「………ホント、気味悪いわね。ま、神隠しにあったか否かってんなら、今、私たち神隠しにあつてるわよね」

蓮子は壁に水色の子供のような字で沢山書かれた「おいで」という文字の前で呟く。

「蓮子ーっ、ドアあつたよーっ」

すると、十数メートル先からメリーがこちらに叫んでいるのが聞こえた。

「はあつ、はあつ、れ、蓮子さんもメリーさんも速すぎですよ……」

蓮子にようやく追いついたイヴは膝に手を当て呼吸を整える。

「あ、ゴメンね。私たちこういうのみるとどうしてもワクワクしちゃうのよ。」

蓮子は悪びれる様子もなく水筒の水を飲む。

「さ、メリーがドアを見つけたらしいから行きましょ？」
「は、はい。」

「蓮子、なにかしらこれ。……薔薇？」

メリーが指差した机の上に花瓶が乗っており、その中には薔薇が3つ活けてあった。

「……………せっかくだから貰つところか。みんな好きな色せーので指差して。せーの……………」

3人は見事に別々の色の薔薇を選んだ。

蓮子は白、メリーはピンク、イヴは赤だ。

「そういえば薔薇つて色ごとに花言葉あつたよね。確か……………赤は「愛情」「美」「情熱」とかで、白は「純潔」「深い尊敬」とかで、ピンクは「しとやか」「上品」「感銘」とかだつ

「た気がするよ」

「ふーん。蓮子って大学での成績はそこまでじゃないくせにそんなことは知ってるのね。」

「失敬な！雑学だよ！ぎ、つ、が、く！」

「情熱……かあ……」

イヴは手元の赤い薔薇を見つめる。

「つてゆうか蓮子って純潔のイメージがないわ」

「むかつ」

「あの、2人とも、その奥のドア、行かないんですか？」

イヴが痺れを切らしたのか、2人に催促する。

「……………蓮子、空いてるわ」

「カギがかかってないほうが開ける時ドキドキするわよね。さあて、行きましようか」

蓮子はノブに手をかけ、ゆっくりと扉を開いていく。

部屋の中には、巨大な絵があつた。そこに広がっていたのは、女性の顔だった。

「うわっ！顔っ！！こわっ！！」

「何よその三連コンボ」

思わずメリーが突っ込む。

「そのバラ 朽ちる時 あなたも朽ち果てる」ねえ。」

「蓮子。バラって私たちが持つてる薔薇ってこと？」

蓮子は少し考える仕草を見せて、かもね、と返した。

「あ、カギだ……」

その時、イヴが絵の下に落ちているカギを見つけた。

「よし、これであのドアが開くといいんだけど……」

蓮子がカギを拾い上げた途端、

絵の女性の顔が歪んだ。

「うわああー……っ！！」

3人は慌てて部屋から退避する。

「はっ………はっ………、な、なんで絵が動くのよ………！」

「わ、わかんないよそんなの………っ！！」

「と、とにかく早く逃げましょう！」

イヴの一声で3人はスタコラサッサと部屋から離れた。

「つて！おいでの文字がかえせになってんだけど！」

蓮子は走りながらそう叫ぶ。

「無視よ蓮子！早く逃げないと！」

メリーの一言で蓮子のはつとして、走る速度を上げる。

3人は先程のカギ付きのドアの前で3人仲良く左足でブレーキをかける。

「早くっ！早くカギっ!!」

「ちよつと黙っててよ！」

もたつく蓮子をメリーが急かす。

「開いた!!」

がちり、と鈍い音がして、ドアが開く。

3人はドミノ倒しになり、ドアに駆け込む。

「あ、危なかった……………」

「もう戻りたくないわね……………」

「は……」

3人は各々の感想を述べる。

「今度は緑……単調ね。」

メリーははあとため息を吐く。

「虫の絵ばっかり……」

イヴも先程の疲労で消沈している。

「ま、行かなきゃ出られないんだからさっさと行きましょ」

蓮子はさっさと行ってしまふ。

「はしにちゆうい……？はしってなんだろ」

蓮子は深く考えず進もうとする。が、

「痛っ!!」

蓮子の右肩を激痛が走る。

蓮子が右を確認すると、黒い手が壁から伸びてきていた。

どうやら肩を引つ搔かれたようだ。

「いてて……つてあれ？」

蓮子はそこである不可解なことに気づいた。

あれほど強く引つ搔かれたにもかかわらず、蓮子の肩からは全くといっていいほど傷

がついていない。

そのかわり、薔薇の花びらが少し散っていた。

「ちよつと蓮子、大丈夫?!」

騒ぎを聞きつけたメリーとイヴが蓮子のもとに駆け寄ってきた。

「大丈夫。ただ薔薇の花びらが散っちゃってただけだから。」

「でも、さっきのメモに……」

とメリーが言いかけたとき、蓮子も何かを察したかのようにはつとする。

「そのバラ 朽ちる時 あなたも朽ち果てる」……」

蓮子は先程のメモの真意を理解した。

「怪我したときはこのバラが身代わりになってくれるけど、そのかわりこのバラが全て散ったら持ち主も死ぬ……ってことか」

蓮子の言葉に、その場の全員が戦慄する。

「あ、そうだ。カギ見つけたの。どこかで使えない?」

メリーは蓮子にカギを手渡す。

「緑色のカギ……」

蓮子が周りを見渡すと、そこには緑色のドアがあった。

「あれじゃないですか? ドア……」

「かもね。行こっか」

蓮子は立ち上がり、ゆっくりと歩みを進める。

「……………開いた」

再びがちり、と鈍い音がして、ドアが開く。

そして、3人は躊躇わずドアを開ける。

「猫……………なの？これ……………」

「ねえ蓮子、鼻の部分が魚の形に凹んでるけど……………」

「魚を持つてくればいいんでしょうか？」

3人は辺りを見回す。そこには2つの道があった。

「どっち行く？別れる？それとも一緒に行く？」

「別れて探索しましょう。その方が効率いいでしょ？」

蓮子は自慢げに答える。

「じゃあメンバー分けは、じゃんけんでいいわよね。負けた人が1人ってことでっ！」

メリーの提案に全員が賛同する。

「「じゃーん、けーん……………ポン!!」」

勝負は一回でついた。……………蓮子の敗北である。

「はあ……なーんであそこでチヨキを出したんだ？ついてないなあ……」
蓮子は大きくため息を吐く。

「いたっ!!」

その時、何かにつまづき、蓮子は転倒してしまった。

「なんかにつまづいた………？って、ヒビ入ってるし。」

蓮子の足元にはつまづきそうなヒビが入っていた。

その時、チカチカと照明が点灯する。

「なに？また停電？」

直後、5つ並んでいた像の1つが動き出した。

「うわっ!!うっ、動いた?!!」

像はどんどん蓮子に近づいてくる。が。

「……………」ケた……………」

像は先程蓮子がつまづいたヒビにつまづき、転んでしまった。

像はがちちゃん、という音を立て、崩れ落ちる。

「あ、花瓶……水も入ってる。……薔薇入れてみようかな？」

蓮子が薔薇を差し込んだ瞬間、薔薇は凄く速さで水を吸い上げ、花をつけた。

「うわっ、花びらが戻った……あ、水無くなっちゃったな……って、ん？何これ……」

蓮子が像の破片の近くに落ちている何かを拾い上げる。

「……………木でできた魚の尻尾……？さっきのこのカギにできそうだけど、頭が無いからなあ……」

蓮子はしようがない、と付け加えもと来た道に戻った。

「あ、蓮子。魚の頭見つけたんだけど、尻尾持ってたりまする？」

「え、うそ……メリー頭の部分持ってんの？」

メリーとイヴは頷く。

2人がパーツを見せ合うと、魚はぴたりと合わさり、1つのカギになった。

「あつ、カギになった……。じゃあはめ込んでみようか」

魚は壁に吸い付くように、しつかりハマった。

すると、ニヤア、という声が反響し、奥へ続く道が開いた。

「……………まだあんのね。……………行ってみますか」
3人は更に奥へと進んで行った…

a c t . 3 うっかりさんの物語

「……………」

「……………」

「……………まだ?」

蓮子は憎々しげにそう零す。

ネコの道に入ってから体感で10分は歩いただろうか。

しかし、いくら歩いても一向に出口に辿りつけない。

「あ、あそこ、すこし光がさしてます!」

イヴが期待を込めた眼差しで蓮子たちを見つめる。

「うん、わかった……………」

蓮子とメリーは力無くそう答える。

漸くネコのトンネルを抜けて、3人は一面真っ黄色な部屋に出た。

「なにこれ……………ギロチンじゃない……………物騒ねえ。」

蓮子は疲弊しきつているのか、弱々しくため息を吐く、
「徐々にながらってきいてないかしら？」

メリーが貼つてある絵を一瞥して、うーんと唸る。

「ま、さつさと行きましょ、さつさと」

蓮子の一声で、3人は足早に通り過ぎようとするが、

「!! 蓮子、危ない!!!」

メリーが突然蓮子の服を掴んで後ろに引く。

蓮子は無理矢理引っ張られ、尻餅をついてしまった。

「いたた……………なにすんのおメリー……」

蓮子がそう言いかけた途端、先程まで蓮子が立っていたところに巨大なギロチンが落下してきた。

「ひっ?!」

ギロチンは轟音を立てて地面と激突する。

そして、床がボロボロに砕け散ってしまった。

「あ、危なかった……………ごめんねメリー、ありがとう」

蓮子は額を流れる冷や汗を拭う。

「どういたしまして。立てる?」

「うん」

メリーが差し出した手を掴んで、蓮子は立ち上がる。

「イヴちゃんも大丈夫だった?」

「は、はい。おかげさまで無事です……………」

イヴも突然のことで大分困惑しているようだ。

「ふう。こんなデストラップが仕掛けてあるなんてね。気をつけないと……………」

3人はゆっくり先に進んでいった。

「……………单调すぎるわね。色の在庫無くなるんじゃない?」

蓮子たちを待ち構えていたのは、今度は真っ赤な部屋であった。

「いちいち文句言ってたらキリが無いわよ蓮子」

「そうだよね、行きましょう」

話をしながら進んでいったため、蓮子たちは前方の確認を怠っていた。

「いたっ!」

その結果、イヴが彫刻を頭をぶつけてしまった。

「あ、イヴちゃん!大丈夫?」

「は、はい。大丈夫……です」

イヴは頭を摩りながら立ち上がる。

「……………ねえ。何?この手抜き感……………ゲルテナってわかんないなあ……………」

イヴの介抱をしていたメリーをよそに、蓮子はイヴがぶつかつた彫刻を睨んでいる。

「……………「あ」ってなによ、「あ」って。ん、なにこれ?破片?」

蓮子は破片と思われる物を拾い上げる。

「これ、カギだ……………」

蓮子がそう呟いた途端、パリン、と何かが割れる音が響く。

3人が同時に視線を音のした方に移す。すると、そこには…………

額縁から上半身だけ出た女が這ってこちらに向かつて来ていた。

「……………どう思う?」

「いや、蓮子、どう思うつて……」

「き、綺麗な女の人ですね、あはは……」

「「うわあああああ!!!」」

やはりと言うべきか、3人は一目散に逃げ出す。

「ドアっ！ドアっ!!」

蓮子は赤いドアを発見し、そこに3人が転がり込む……のを、ドアにかかっているカギが邪魔をした。

「お、お願い……このカギで合つてて……!」

蓮子は赤いカギを鍵穴にねじ込み、思い切り回す。

そして、3人はやっと部屋に転がり込めた。

「はあっ……はあっ……撒いた?」

蓮子は息を切らしながらメリーたちに問う。

「多分、大丈夫でしょ……」

「うう……怖い……」

「まあ、取り敢えずみんな無事で良かったよ」

そう言つて蓮子は次の部屋に続くドアを開こうとするが、またしてもカギがかかっている。

「このカギ……じゃ開かなさそうね」

蓮子の持つ赤いカギでは鍵穴に当てはまらなかった。

「うーん、そう簡単には行かないか。外に出るのは嫌だし、取り敢えずこの部屋を調べてみないと」

3人は疲れた身体に鞭を打って、部屋を調べ始める。

「あの、蓮子さん！メリーさん！絵本見つけました！」

「絵本ねえ。今時珍しいね」

蓮子はイヴに渡された絵本を眺める。

「うっかりさんとガレット・デ・ロワ」？作者も不明、いつ書かれたかも不明……」

「蓮子、取り敢えず読んでみたら？」

「そうね。そうしよつか……」

ある日、桃色の子は友達の水色の子の誕生日を他2人の友達と一緒に祝うため、パーティーを開きました。

桃色の子は水色の子のためにガレット・デ・ロワを作りました。

ガレット・デ・ロワは中にコインの入ったお菓子です。

自分の食べたピースの中にコインが入っていたら、その人は幸せになれるといいま
す。

おもしろそうだ、とみんなで一つずつ食べることにしました。

そしてケーキを切り分け皆で食べると水色の子が、

「何か固いもの飲み込んだじゃった！」

と言います。

「あはは、うっかりさんだねー!」「きつとコインだ!」と友達は叫びます。

中に入っていたコインを飲み込んでしまうなんて、水色の子はうっかりさん。

桃色の子は食べ終わったケーキの皿を片づけに、台所へ行きました。

すると、お母さんが何かを探していました。

お母さんは書斎の鍵を無くしてしまったようです。

書斎の鍵はいつも机にあるはずなのに……と、桃色の子は机の上を確認してみま
した。

すると、そこにはコインが一枚、置いてありました。

「あれ、コインだ……このコインたしか……パイの中に入れてたはずなのに……もしか
して……」

鍵が見つからず、お母さんは途方に暮れてしまいます。

「どうしましょう……お父さんに怒られちゃうわ。」

「どうしよう……」

桃色の子は焦ってしまいます。すると、皿からケーキを切り分けるための包丁が落ちました。

「私ってばうつかりしてたわ！お母さん、カギ、みつけたよ！」

「……………いやあ……………なんて言うかこう……………ねえ？」

絵本を読み終え、蓮子はメリーたちに視線を移す。

「ええ……」

「え？え？なんで桃色の子はカギを見つけたんですか？だってカギは……………むぐ。」

2人を問い詰めるイヴの口を蓮子は塞ぎ、ゆっくり首を横に振る。

「世の中には、知らない方がいい話つてのがあるのを覚えておいた方がいいよイヴちゃん」

「は、はい……………わかりました……………？」

「絵本の最後のページにカギが入ってたわ。わざわざ書斎のカギって書いてね」

「良い趣味してるわね……………」

メリーは大きくため息を吐いて、蓮子からカギを受け取る。

「さ、開けましょ」

躊躇うのが無駄だと判断したのか、メリーは諦めて扉を開く。

それに続き、蓮子、イヴも扉に入っていく。

再び長い通路が続いていくが、3人はもう飽きたように進んでいく。

その時、メリーがそういうえば、と口を開く。

「蓮子がこういうことしてる理由って、なんでなの？100年前の事件っていつても、私にも教えてくれなかったじゃない」

「んー、100年前に東京であったことを知りたいの。その真実をね」

「それで？蓮子、100年前の事件って、具体的に何があったのよ？貴女のご先祖様なんでしょ？事件に関わったの」

「うん。東京が壊滅したのはその事件のせい。謎の五人組が深夜の東京上空で暴れ回り、東京は見事に木っ端微塵。復興も不可能だったもんだから、首都が京都に移されたってわけ」

「それで、蓮子さんのご先祖様ってどんな人だったんですか？」

「うーん、私のご先祖様、曾祖母の宇佐見董子が五人組を撃退したって聞いたけど……私には面識も無いし……ってか、生まれる前に亡くなってるし、わかんないなあ」

「そうなのね。じゃあ蓮子、貴女、その帽子も……」

「そう。ひいばあちゃんの見。宇佐見家に受け継がれてきたみたいだけどね。不思議なもので、これ被つてると落ち着くのよ」

蓮子は両手で帽子を深く被り直す。

「そういえば蓮子さん、その五人組をよく退治できましたね、宇佐見蓮子さん」

「噂によると、超能力者、だったらいいよ？私のひいばあちゃん」

「じゃあ蓮子も超能力者なの？」

「メリーも知ってるでしょ、私の眼のことくらい。ってか、あんたもあるじゃん、不思議な眼」

蓮子はトントンと自身の右目の下を人差し指で叩く。

「そうだけど……できないの？スプーン曲げとか」

「じえんじえん出来ませんよーだ」

蓮子はべー、と舌を出す。

「しかも、当時は直ぐに情報が拡散する時代だったのに、その事件について何も残ってないの。1つもよ？おかしくない？これは何者が情報を操作して隠蔽したに決まってるよ」

蓮子はメリーに何度も人差し指を突きつけて説明する。

すると、突然イヴが声を上げる。

「あ、あそこ、人が倒れています！」

イヴが指差した方に、青い髪の男性が倒れている。

「ふう。ようやく人間に会えたわ……」

蓮子はほっと一息つく。

「うう……」

男性は小さく唸るだけで、動かない。

「あ、この人もバラを持つてる……」

「でも散りかけですよ？」

「あ、あそこ、花瓶があるよ。ちよっと待ってて」

蓮子は男性の薔薇を拾い上げ、花瓶がある方へ駆け出す。

「また花が咲いてくれるといいんだけど……」

蓮子が花瓶に薔薇を生けると、瞬く間に薔薇は水を吸い上げ、花をつけた。

「よかった！咲いた！」

蓮子が叫ぶと同時に、男性はうめき声をあげながら立ち上がる。

「あ、あら……あたしは、どうして……？」

「……大丈夫ですか？」

イヴは心配そうに男性を見つめる。

「そ、そうよ、薔薇を奪われて……」

男性は一つ一つ思い出していく。

「メリー、メリー」

蓮子は手招きでメリーを呼び寄せてヒソヒソ話をする。

「ねえあの絶対こっちの人よね?! ドドスコスコとかどんだけー! とか言ってるよね?!」

「あ、あんまり言っちゃダメよ蓮子。そういう人もいるんだから……」

メリーと蓮子は横目で男性を見る。

「助けてくれてありがとう。アタシギヤリー。あなたは?」

「イヴです。」

「そ。イヴ、よろしくね。」

「はい!」

イヴはギヤリーの手をとる。

「アレレー? イヴチャン、モウイキトウゴウシテマスヨ、メリーサーン?」

「ソウネレンコ。ワタシタチノメノサツカクカシラー?」

蓮子とメリーは半ば放心状態になりながらお互いに顔を見合わせる。

「それで、あなたたちは？」

すると突然、ギャリーから2人は声をかけられる。

「ひゃ、ひゃい！」

突然のことに驚いたのか、蓮子は声が裏返ってしまう。

「う、宇佐見蓮子です！」

「ま、マエリベリー・ハーンです！」

蓮子とメリーは背筋をピンと張って自己紹介をした。

「そう。よろしくね、2人とも。アタシはギャリー。」

ギャリーが差し出す手を、2人はぎこちなく掴む。

「はい。よろしくお願ひしますギャリーさん」

「よし、そうと決まればはやく奥へ行くわよ3人とも！」

「お、おー……………」

「はいー！」

a c t . 4 深層

「さつ、次行きましよ、3人とも。」

ギャリーは3人を急かす。

「……メリーさんメリーさん、あの男性の声が、その、オカマ口調なのは私の幻聴なのでしようか?」

「いいえ蓮子。私も聞こえてるわ」

蓮子とメリーはイヴとギャリーの数メートル先を早歩きで進んでいた。

「ま、まあ、そんなの気にしても仕方ないわ。人手は多いほうがいいんだから。」

「そうね……」

メリーと蓮子はなんとか割り切って、2人は歩いていく。

「もう疲れたよパト……メリー。飽きたからモツヂボールでもやんない?」

「も、モツヂボール?なにそれ……」

メリーがジト目で蓮子を見つめる。

「説明しようっ!モツヂボールとは、相手にボールをぶつけるスポーツなのだ!そう、五郎使いの宇佐見とは私のことよ!あと、審判が少し邪魔なの!」

蓮子は鼻の下を伸ばす。

「ご、五郎?なにそれ……」

メリーは腫物に触るときのような顔をして蓮子に問う。

「全く弾まないボール。国際試合では革製、普通は布製が使われるんだけど、私は五郎が一番使いやすいのよ。」

「いや、だから五郎ってなんなの?!明らかに一個だけ人物名じゃない!」

「メリー、モツヂボールの歴史はナメないほうがいいわ。15世紀、ドイツのジジイがとなりのジジイに石を投げた……。これがモツヂボールの起源とされているわ。」

「すぐくしょうもない起源ね……」

メリーは半分呆れ顔で言う。

そんな会話をしながら蓮子は曲がり角に差し掛かる。

直後、誰かが蓮子に激突してしまう。

油断していた蓮子もぶつかった人も尻餅をついてしまった。

「いたた……、ごめんなさい、大丈夫ですか?」

蓮子は頭をかきながら立ち上がる。

ぶつかった人は、メリーによく似たブロンド髪の少女も同様に立ち上がる。

「あ、大丈夫です」

そして、パンパンと服についた埃を払う。

その時、イヴとギャリーが追いついてくる。

「2人とも速すぎよ。……って、あら？どうしたのその子？」

「さっきぶつかっちゃって……。」

蓮子はてへへ、という感じで頭をかく。

「こんにちは……、えっと、イヴです」

すると、イヴが金髪の少女に近づいていき、右手を差し出す。

「……私、メアリー。よろしくね、イヴ！」

金髪の少女、メアリーは一瞬驚いたような表情を浮かべたが、すぐに笑顔を見せて、イヴの差し出した手を握る。

「こっちこそ、よろしく」

イヴも握られた手を握り返す。

「それで、メアリー。あなたも薔薇を持つてるんだ」

蓮子は関心を示している。

「黄色、ね。これで5本目……戦隊でも作れって言われてるのかしらね？」

メリーは軽く冗談を飛ばす。

「あはは、そうかもしれないわね。」

ギャリーたちは笑って、どんどん先に進んでいく。

「うげっ、気持ち悪……」

蓮子の口から反射的にそう零してしまう。

彼女がそう言うのも無理はない。何故なら5人が入ったこの部屋はいかにもホラー映画に出てきそうな真つ青の人形が所狭しと並んでいる部屋だったのだ。

「うっ、ホントに気持ち悪いわね……」

ギャリーも口元を押さえている。

「え？そうかな？可愛いと思うけど……」

しかし、メリーは「可愛い」と評価した。

「えっ、ホントに……？メリー、それはちよつとどうかと思うわ……。ま、まあ、人の感性は人それぞれって言うし……。」

蓮子はうーん、と唸る。

「2人とも変わってるなあ。この子達可愛いじゃない。」

続いて、メアリーも「可愛い」と評価した。

「ウソ……。」

今度は蓮子の代わりにギャリーが引く。

「ねえ、イヴはどう思う？」

メアリーがイヴの手を握って問う。

「えっ?! うーん、可愛いと思うよ……。」

イヴも慌てて答える。

「ほら見てよ、ギャリー、蓮子。3―2で可愛いでけつてーい！」

メアリーは嬉しそうに飛び跳ねる。

「……ギャリーさん、おかしいのは私たちなんでしょうか……。」

「どうかしらね……。」

蓮子とギャリーは互いに顔を見合わせる。

「ま、まあ、同じ感情を共有できる人がいて良かったわ」

「ですね……………」

ギャリーと蓮子は頭に？マークを浮かべながら先に進んでいった。

「……………なにこれ？」

「嫉妬深き花」……………ですって」

蓮子たちは狭い通路の真ん中に飾られた絵を見ていた。

「道は二手に分かれてるわね……………。どっちに行く？」

……………!!」

ギャリーがそう問いかけた瞬間、メリーがイヴとメアリーを突き飛ばし、ギャリーが蓮子の手を掴んで自分の方へ引き寄せた。

「うわっ?!」

三人が驚きの声をあげたその時、絵の目の前の地面から荆棘が飛び出してきた。荆棘はどんどんと絡まり、やがて小さなトゲの壁を作ってしまった。

その結果、蓮子たちは、蓮子とギャリー、メリーとイヴとメアリーにそれぞれ分断されてしまった。

「いてて……ありがとうございます、ギャリーさん」

蓮子は冷や汗を拭ってギャリーに礼を言う。

「気にしないで。ねえメリーちゃん、そっちは大丈夫？」

ギャリーは荆棘の奥へ向かって叫ぶ。

「大丈夫です！」

すると、程なくして荆棘の中から返答が返ってくる。

「とにかく、合流できる場所を探しましょう！」

蓮子も荆棘の方へ叫ぶ。

「わかった！蓮子、気をつけてね！ギャリーさん、蓮子をよろしくお願いします！」

メリーの声が聞こえてきた為、蓮子とギャリーはこちら側にある扉に向かって行く。

「メリーも2人をよろしくねー！」

蓮子も最後に叫ぶ。

「……………ドアを開く音、そして蓮子たちの気配が消えた……。よし、私たちも行くか。早く2人と合流しなきゃ。」

「はいー！」

「よし、行くぞー！」

イヴとメアリーはそれぞれ力強く返事をする。

そして、メリーたちはこちら側にある扉に手をかけた。

「ここは、倉庫、みたいですね。」

イヴは周りを見渡してそう言う。

「あつー！パレットナイフ！ねえねえ2人も、これならあの荆棘を切れるんじゃない?!」
すると、メアリーが声をあげる。

その手には、パレットナイフが握られていた。

「たしかにそれなら切れそうね。よし、それで荆棘を切つて蓮子たちを追いかけましよう！」

メリーがそう言つて先程入ってきた扉を再度見ると、首から上が無いマネキンのよう

な作品が道を塞いでいた。

「あ、あれ？さつきまでこんなの無かったのに……………」

イヴも困惑した表情を浮かべている。

「うーん、どうにかどかせないかな？」

メアリーはそう言う。

その後、押ししたり引いたりしてみたものの、ピクともしないため、道を塞ぐそれを動かすことは諦め、メアリーたちは先に進むことにした。

「あれ、穴が開いてる……………」

しかし、進んだ先は大穴が開いており、先に進めなくなっていた。壁には絵が掛かっているが、ジャンプなどでは到底及ばないため、メアリーたちは行き詰まってしまった。

しかし、その時、絵が突然動きだして、足場になるように配置された。

「うわっ、動いた?！」

メアリーたちは状況が理解出来ず戸惑ってしまっていた。

「あれ？これ、なんも起こらないじゃない」

一方、蓮子たちはメリーたちの真下の部屋にいた。

蓮子が青い紐を引っ張っていたが、何も起こらず小首を傾げていたのだ。

おそらくこれのお陰でメリーたちが通れるようになったのだろう。

「ちよつと、蓮子！あんまり変なところ触んないほうがいいわよ！」

「あつ、はい……」

再びメリーたち。メリーたちは絵の橋を渡り終えていた。

「ねえ、この箱、ここの物じゃない気がする……」

ふと、メアリーが口を開く。

「え？」

メリーからそんな抜けた声が出てしまう。

「よーし、……こうだっ!!」

瞬間、メアリーは三角形の箱を押して穴に落としてしまった。

「ええっ?!」

イヴも驚きの声をあげている。

「よし、一丁上がり!」

メアリーは大きく息を吐く。

「大丈夫かな……」

メアリーは心配そうに穴を見つめていた。

「そんなことより、ほら、次々!」

メアリーは2人を急かす。

「うう、蓮子がいるみたい……」

メアリーは苦笑いをしながらそう言った。

「マネキン……の首みたいね。」

メアリーたちは大広間に出たあと、次に進む扉の鍵を探すため、色々部屋を物色してい

た。

「あの、このマネキンの首……、落としてみませんか？」

唐突にイヴがそう言い出す。

「えっ、落とすの？……大丈夫かなあ……」

メアリーが珍しく不安そうな顔をする。

「うーん、それくらいしかやることなさそうだし、いいんじゃないかな？」

メアリーが賛成したため、イヴはマネキンの首を落とした。

すると、地面にヒビが入って、ガスが噴き出し始めてしまった。

「あーあ。床にヒビが入っちゃったよ。」

「あ、あと木の鍵あつたよ。」

メアリーがイヴたちに見せる。

「よし、じゃあ2人とも、他の部屋行きましょう！」

メアリーはイヴたちを急かす。

「うーん、これ、パスワードなんだから……」

メアリーは首を傾げる。

「この絵が関係してるんじゃないですか？」

イヴは隣にある絵を指差す。

そこには1つ絵が掛けられていた。

「うーん、名前を入れろってことなのかな？」

メアリーはそう言う。

「でも、名前なんてわからないですよ？名札が無いし……」

イヴは肩を落とすが、

「あ、でも私、蓮子と一緒にパンフレットを買ったから多分載ってると思うよ、その絵。」

メリーがそう言えば、とカバンからパンフレットを取り出した。

「え……と、この絵は……、これだ、「ミドリのよる」！」

メリーはパスワードを入れる。

すると、がちり、という鈍い音が響き、ドアが開いた。

「ゲルテナの、作品集……、上巻なのね。下巻はどこにあるんだろう？」
メリーは周囲を見回す。

「あ、メリーさん、これ、鍵穴の絵が……」

すると、イヴが壁に飾ってある絵を指差す。

それは、「1つの鍵穴」という作品であった。

「もしかしてこれって……」

そう言つてメリーは木の鍵を取り出し、鍵穴に差し込んで回した。

するとかちり、と音がした。

が、メリーたちのところには特にこれといった変化は見られなかった。

「うーん、何か変わったのかな？」

メアリーは小首を傾げる。

「とりあえず外に出ましようか。」

メリーの言う通りに、3人は外に出る。

「……………あれ？」

ふと、メアリーが口を開く。

「どうしたの？」

イヴが不思議そうにメアリーを見ると、

「……さつきまで誰もいなかったのに絵の中に人がいて、なんか釣ってる。」

メアリーが指差した方には、「釣り人」という絵が飾られてあった。

しかし、メリーたちが始めてこの広間に出てきたときには誰もいなかったが、いつのまにか釣り人が現れ、傘を釣っていた、

「いつのまにかなんか釣れてる……」

メリーも絵の前に立ってうーん、と唸る。

すると、釣り人が動き出し、赤い傘を絵の外に出した。

「あ、渡してくれた……」

メリーは赤い傘を拾い上げる。

「あ、そういうえばマネキンの頭があつた部屋に「カサをなくした乙女」つてのがあつたよ。もしかしてカサつて……」

メアリーの一言で、3人ははつとする。

「これね……………」

メリーは絵を見つめる。

メリーは絵の前に傘を掲げる。

すると、傘は絵に吸い込まれ、絵の女性が傘を差す。

直後、部屋の中に雨が降り出した。

「うわっ、雨?!」

メリーたちは咄嗟に頭を覆う。

そして、慌てて部屋を出る。

「そういえば、蓮子とギャリーさん、大丈夫かな……………」

「これで、5個目、か。」

蓮子は桃色の玉を拾い上げる。

直後、桃色の玉は消えてしまった。

「これであと2個ね。」

ギャリーも蓮子に声をかける。

「はい。」

2人は絵の具玉を7つ集めなければならず、この蓮子が拾ったもので5つ目だったのだ。

「とりあえず、この本棚を調べてみましょう。」

ギャリーと蓮子は本棚を調べる。

「あつゲルテナ作品集の下巻がありましたよ」

蓮子はギャリーを呼ぶ。

「上巻じゃないのね。じゃあ、読んでみましょうか」

言われるまま、蓮子は適当にページを開く。

すると、Mのページが開かれた。

しかし、そこに書かれている内容に2人は絶句してしまう。

作品の内容はこうだ。

『メアリー』 一〇〇〇〇年

ゲルテナが手掛けた生涯最後の作品。

まるでそこに存在するかのように佇む少女だがもちろんのこと彼女も実在しない人物である。

そして、となりのページには2人にとつて見覚えのある少女が佇んでいた。

「うそでしょ……？ 実在しないって、じゃあ……」

「メリーたち、大丈夫かな……」

蓮子は不安そうに俯く。

「でもとりあえず、今の私たちに出来ることをしましょう」

ギャリーの言葉に、少し平静を取り戻したのか、蓮子は頷いて、その部屋を後にする。

「……またこの人形……」

蓮子たちは苛立ちを露わにしながら言う。

青い人形は度々蓮子たちの前に現れては邪魔したりしてくるので、2人は相当に頭に

来ていた。

不気味なことも相まって、畏怖と憤りが同時に押し寄せてきている。

すると、人形はケタケタ笑い出し、赤い玉を落としてから走り出し、とある部屋の中に入っていた。

「まったく、なんなのよあの人形は！」

ギャリーもイライラしながら赤い絵の具玉を拾う。

「とりあえず、追いかけてみますか？」

蓮子の問いに、ギャリーは数秒考えたあと、

「そうね。もう調べてないところなんてあいつが開けた部屋しか無いし……」

そう言つて2人は警戒しながらも先ほど人形が入つていった部屋に入る。

「うわっ……」

蓮子たちは思わず後ずさりしてしまふ。

そこは先程よりも大量に青い人形が存在している部屋だった。

「あつ、絵の具玉……」

蓮子が指差したところには、白い絵の具玉が落ちていた。

「あんまり長居はしたくないわね。さつ、早いとことつてお暇しましょう。」

そう言つて、ギャリーが絵の具玉を取つた瞬間、ガチツ、という鈍い音が響く。

「えっ?!」

蓮子が慌てて扉を開けようとするが、ドアは開く気配を見せない。

「うっ、嘘?!閉じ込められた……?!」

すると、扉に青い文字が映し出される。

「また たからさがし しようよ

だれがカギを もってるかな？」

「……………!!もう!!あんたらの遊びには付き合ってる暇が無いんだっちゅうのっ!!」

蓮子は思い切りドアを蹴飛ばすが、ピクともしない。

「蓮子!そんなに感情的になってる暇はないわ!早く鍵を探すの!」

ギャリーの一喝を受けて、蓮子ははっとする。

そして、すぐさま鍵を探す作業に入りだす。

その時、蓮子は奥の大きな額縁から巨大な青い人形が這い出てきているのが確認できた。

直後、人形の腹部から鍵を見つけ、慌てて鍵を開ける。

「よしっ、開いた!!」

蓮子は思い切りドアを開け放ち、ギャリーと一緒に外に出る。

そして乱暴にドアを閉める。

「はっ、はっ、……………大丈夫ですかギャリーさん……………?」

「生きた心地がしないわ……………」

2人はそこで数分間放心していた。

「そつ、そつだ、メアリーが!」

ふと、思い出したように蓮子が声を荒げる。

「そうだ、2人が危ない！」

そうして2人は駆け出していく。

……先程のドアは、蓮子が蹴った位置に大きなヒビが入っていた。

「ねえ、2人とも、何処へ行くの？」

一方、下の階へと続く階段にて、メアリーがパレットナイフを持って、イヴとメリーにジリジリとにじり寄ってきていた。

「メアリーっ!!」

すると、下の階から誰かが駆け上がってくる音が響く。

「えっ?!」

メアリーは目を見開く。

蓮子はメアリーの気が逸れた一瞬の隙をついてメアリーを蹴り飛ばす。

メアリーは地面に倒れる。

「えっ、えっ?!」

メリーとイヴは何がなんだかわからないと言った感じで困惑している。

「話は後……こつちよ！」

ギャリーはイヴとメリーの手を引く。

「よし、この像を退けて………」

ギャリーは頭の無い像を押して動かし、急いで階段を降りる。

「さあ、早く！」

急かされるまま、イヴたちも階段を下っていく。

「ちよ、ちよつと蓮子！何があつたか教えてちようだい!!」

メリーは走りながら蓮子に問う。

「メアリーは人間じゃなかったの！絵から出てくる女やあの顔の無い像と一緒に！」

蓮子の言葉にメリーとイヴは戦慄する。

「そんな……!」

イヴも後ろを振り返る。

「とにかく、早くここから抜け出すこと、いいわね?」

ギャリーは冷静に言う。

直後、蓮子たちはある変化に気づく。

階段がどンドン変化していつているのだ。

まるで子供がクレヨンで描いたような感じに変わっていった。

「スケッチ……ブック?」

最終的に完全にクレヨンの絵になり、クレヨンで sketchbook と書かれた空間に変わった。

「今更何が出てきたって驚かないわよ……!」

ギャリーは憎々しげに呟く。

「さあ、止まってもメアリーに見つかるだけよ!急いで!」

「あつ、みんな、これ！鍵と………ドア！」

蓮子が桃色の建物とプラスチック製の鍵を見つけ、みんなを呼び止める。

「でも鍵がかかつてるよ？」

メリーがドアの前で狼狽する。

「ほら、この鍵で開くんじゃない？」

蓮子が鍵を桃色の鍵穴に差し込む………が、

「入らない?!」

そう。鍵が鍵穴に一致しないのである。

直後、イヴが何かを見つける。

「あ、これ、………「もものかぎ」は かならず おもちやばこ にもどすこと」………?」

「もしかしたら、この「もものかぎ」がこの鍵なのかしらね？」

そのとき、蓮子が奥に大きな建物を見つける。

「もしかしてあれにプラスチックの鍵を………?」

蓮子たちは急いで大きな建物に駆け寄る。

そして、蓮子の読み通りにプラスチックの鍵はぴつたりとハマった。

そして、ドアはゆつくりと開いていく………

そこは、大きな箱が1つあるだけの部屋だった。

「ここがおもちゃ箱……かしら？」

ギャリーは箱を覗き込む。

箱の奥は真つ暗で、何があるか全く見当がつかない。

「こんなところに本当に鍵が……？」

蓮子がそう呟いた途端、

「行ってみたら？」

4人の後ろから聞き覚えのある少女の声が響き、4人は思い切り背中を押され、おもちゃ箱の中へと真つ逆さまに落ちていってしまった……

act. 5 メアリー

「いつ…………たあ…………」

蓮子は頭を抑えながらむくりと起き上がる。

周りを見回すと、おもちゃの汽車などが散乱していた。

「うう…………大丈夫…………ですか？」

蓮子は周りに呼びかける。

直後、3人から各々の返事が返ってくる。

「ここがおもちゃ箱…………かしら？」

ギヤリーは周りを見渡しながらそう零す。

「取り敢えず、桃の鍵を探しましょう。きつとここにあるはずですから」

メリーが落ち着いた口調で進言する。

「…………そうね。気色悪い人形もあるし」

蓮子は顔を引きつらせながらお腹の上に乗っていた青い人形を投げ飛ばす。

「そういうえば、薔薇が…………」

すると、イヴが思い出したように言う。

イヴの薔薇は、花びらは殆ど散ってしまっている。

恐らく、先程上から落ちてきた時の衝撃で散ってしまったのだろう。

その証拠にイヴが倒れていたところに無数の赤い花びらが落ちていた。

それは、ギャリーや蓮子たちも例外ではなく、等しく花びらは殆ど散っていた。

「水もなさそうだし、しょうがないわ。とにかく、怪我をしないように行かないとね。こ

れが全部散っちゃったら、私はおしまいだからさ。」

蓮子は1つ伸びをして、おもちゃ箱を散策し始めた。

「さ、アタシたちも急ぎましょう。」

ギャリーも優しくメリーとイヴに言う。

2人も大きく頷いて、別れて探索を始めた。

「あ！あった！桃色の鍵!!」

蓮子は桃色の鍵を拾い上げ、声をあげる。

「よし、これで真ん中の建物の扉が開くわね！」

ギヤリーも表情を緩める。

すると、その瞬間、空気が一気に淀み始め、人形たちが動きだし、一斉に襲いかかってくる！

「つ!!みんな!走って!!」

蓮子の大声で叫ぶ。

その叫び声に感化されたか、メアリーたちは走りだす。

蓮子たちは階段を登りに登って、先程メアリーに突き落とされた場所まで戻ってきた。

が、さつきまでの空気とは全く異なり、どんよりとした空気がそこにあつた。

それに加えて、床も真っ黒に染まっており、先程おもちや箱の入り口があつた場所には、荊が絡みついている階段があつた。

「なんか、あそこから物凄い境界の力を感じるわ……。」

メアリーが身構えながら言う。

「行ってみましょう！もしかしたらメアリーについてもわかるかもしれないし……」
蓮子も拳を握りしめる。

「でも、どうやってこの荊をどかしますか？ナイフなんか持ってないし……」

イヴの言葉で、全員が黙ってしまふ。

「あー、もう！こんなのぱつと燃やせちやえばいいのに！」

蓮子はイライラしながらそうぼやく。

それを聞いたギヤリーははつとして、ポケットを探りだす。

そして、ライターを取り出した。

「そういえば、アタシライター持ってたの忘れてたわ。これで燃えるかはわからないけど、取り敢えず、3人とも離れてて。」

ギヤリーは蓮子たちを離れさせ、荊に火を放つ。

すると、うまい具合に火は燃え広がり、荊を焼き払った。

「よし、これでOK。さあ、行ってみましょう。」

ギヤリーはライターを投げ上げ、キャッチしてから、3人を呼ぶ。

そして、4人はゆっくり階段を登っていく。

そこは、先程の黒い床の小さい部屋だった。

奥の壁際には、子供用のおもちゃが散乱していた。

そして、その壁には、絵の額縁がある。

その絵は、下の方に小さな黄色い花が描いてあるだけで、明らかに絵として成り立っていないかった。

しかし4人、特に蓮子とギャリーは表情を強張らせる。

「ねえ、蓮子、あれって……………」

ギャリーは蓮子を見る。

蓮子はギャリーと顔を合わせず、表情を強張らせたまま、小さく頷く。

すると、先程蓮子たちが登ってきた階段から足音がしてくる。

「!!」

蓮子たちが慌てて振り向くと、

「……………貴女たち、どうやってここに入ったの?」

遅れてやってきた金髪の少女、メアリーは、いつのまにかパレットナイフから本物のナイフに持ち替えて、蓮子たちにジリジリとにじり寄ってくる。

「メアリー、やっぱり、あんた……………」

蓮子はメアリーを睨みつける。

「ねえ、出てっつてよ。出ていけ、出ていけ、……………」

メアリーはハイライトの入っていない目で蓮子たちを見つめながらゆっくり近寄る。

「出ていけえええっ!!!」

メアリーがそう叫んだ瞬間、クレヨンで描かれた感じではあるが、メアリーを中心に、

地面に赤いヒビが入る。

それと同時にメアリーは蓮子たちの元へ走りだす。

「……………!!」

蓮子はずっと考えていた。

子供、かつ女だからといってもナイフ相手に素手で真正面から戦ってはあまりにも分が悪すぎる。

かといってこのままメアリーの横を4人ですり抜け、階段を下ることはまず不可能と
いつてもいい。

まだ体力のある蓮子やギャリーならメアリーを振り切ることもできるであろうが、メ
リーやイヴは、これまでの探索で体力も気力も底をつきかけている。

これではメアリーに捕まってナイフでブスリだ。

「……………だっつたらもう、これしかないじゃない!」

蓮子はそう叫んで、部屋の奥に走りだす。

「れ、蓮子！何する気?!」

メリーも蓮子に着いて行くが、蓮子の意図がわからなかった。

「ギャリーさんライター!!」

蓮子はギャリーにそう叫ぶ。

ギャリーは蓮子の意図を察したのか、蓮子にライターを投げる。

「間に合え……っ!!」

蓮子は出来得る最高の速さでメアリーが出てきたであろう絵に火を放つ。

「お願い！やめてえっ!!」

蓮子の意図に気付いたメアリーが手を伸ばすが、火はどんどん燃え広がりに、「メアリー」を焦がしてゆく。

「あ……、ああ……、やだあ……!!」

メアリーは絶望の表情を浮かべた後、一瞬で炭化してしまう。

そして、ボロボロと崩れていった。

「……………メアリー……………」

蓮子はメアリーだったモノと「メアリー」だったモノを交互に見つめる。

直後、大きく地面が揺れ、ガラガラと部屋が崩れだす。

「え、ちよつ、なに?!」

蓮子は天井を見上げる。

「もしかして、本来ある筈だったものを壊してしまったから、この世界が壊れ始めてきているのかも……」

メリーが顎に手を当てながらそう思案する。

「うそ?!……まあでも、こんなところで人生終わりつてのは腑に落ちないからね! さあ、もうひとつ走り行きますか!」

蓮子は帽子を深く被り直し、先陣を切つて走りだす。

「大丈夫? イヴ。」

ギャリーはイヴの手を掴む。

「……はい! もうひと頑張りですから……!」

「よし、その意気よ!」

イヴとギャリーは手を繋いで蓮子とメリーの後を追う。

「よし、やっぱりこのカギであつてる!」

蓮子は桃色の家のドアに鍵をねじ込み、強引に回す。

そして、ドアを思い切り開け放つ。

「さあ、ここつちです！」

蓮子たちは家の中の階段を駆け下りていく。

「あーあの絵……！」

ギャリーが指差した先には、蓮子たちがこの世界に来る原因となった「絵空事の世界」が飾られていた。

「でも、どうすれば帰れるんだろう……？」

絵の目の前に来た蓮子たちはそこで行き詰まってしまふ。

すると、電球がああの時のようにチカチカと点滅し、パツと光ったかと思うと、「絵空事の世界」の額縁が消失した。

「額縁が……、もしかしてこれで……！」

ギャリーは確信を持てたのか、絵の中へとジャンプし、なんと絵の中に着地した。

「やっぱり！さあ、3人とも、こつちよ！」

ギャリーは絵の中から手を伸ばす。

「イヴちゃん、先に行つて！」

メリーはイヴの背中を押して、イヴの手をギャリーが掴み、絵の中へ引つ張り上げた。
「ほら、急いで！もう時間が無いわ！」

ギャリーは再度手を伸ばす。

今度はメリーがその手を掴み、絵の中へ入っていく。

「蓮子！早くこつちに！」

メリーの呼びかけに、蓮子も先を急ごうとする。が…

「やれやれ。まさかメアリーを倒しちゃうなんて。流石、宇佐見家の一族だね？……正
確には違うか」

「!？」

絵の中に飛び込もうとする蓮子の横から、何者かの声が聞こえてくる。

「……あんた、誰……?!ゲルテナの作品じゃないわね?!」

蓮子は本能的な震えを感じながら謎の男に問いかける。

「まあまあ。そんなことどうだっていいじゃないか。僕は見てて楽しかったんだしさ。
それより、……蓮子、だっけ？キミ、能力が隔世遺伝してないのに別の力を持つてるん

だね。不思議だなあ……」

男はごく普通の人の形をしているにも関わらず、何か不気味なオーラを漂わせている。

「能力……？ 遺伝……？」

「あれ、知らないの？ なんだよ、底辺の人間たちと過ごしていく間に僕らの気高い血の誇りも忘れちゃったのかい？」

男はやれやれといった感じで首を振る。

「……っ！ あんた、いい加減に……！」

「蓮子！ 早くっ!!」

男に敵意を向ける蓮子に、メアリーが必死に呼びかける。

「！メアリー……！！」

メアリーを見た瞬間、蓮子は絵に向かって走りだす。

「あら、あらら。もう親戚が嫌いになる時期かい？……はあつ、もう……、お兄さん拗ねちゃうぞ？」

すると男は蓮子に右手をかざし、力を込める。

「うっ?!」

すると、蓮子の動きがぴたりと止まった。

「なにこれ……っ?!動か……!!」

困惑してジタバタと暴れる蓮子を尻目に男は右手を上を上げていく。

すると、男の右手の動きに合わせて、蓮子の体も浮き上がる。

「蓮子、この美術館の絵っていろんな世界に通じてるんだよ?日頃の疲れを癒すいい機会だ。どこか旅行に行つてくるといい」

男は蓮子の真後ろにある1つの絵に目を向ける。

それは、「伝説」という絵であった。

蓮子も釣られて後ろを振り向く。

「そんなカッカしてる蓮子ちゃんには、慰安旅行でもプレゼントしてあげようか。」

男が言った意味が、蓮子には全く理解できなかった。

「んじゃ、ばいちゃー!いつてらっしやいやせ〜!」

この時、蓮子は男の意図を完全に理解できた。そう。この男は蓮子を別の絵の中に叩き込もうとしているのだ。

「……………っ!!」

蓮子は唇を噛み締めた後、思い切り声を荒げる。

「メリーっ!!」

「!!……………蓮子……………!」

メリーの体がびくりと震える。

「私……っ！ぜつつつたいに戻って来るから!!いつもの喫茶店で待ってて!明日には……笑ってあなたのところへ戻ってくる!だから、心配しないで!!約束!!」

蓮子は泣きそうな目でこちらを見るメリーに叫ぶ。

「……うん……っ！待ってる、ずっと待ってるから……!!」

メリーも蓮子に向かって叫ぶ。

「あーあー、若い子は元気があつてよろしいことで。消えちゃえ!」

蓮子とメリーのやりとりにイライラしたのか、男は右手を押し込む。

「……っ!!」

すると、蓮子の体が猛スピードで後方に飛ばされる。

直後、「伝説」の額縁が消失し、蓮子はその中へと吸い込まれていった。

そして、そこからは誰も、出てくることはなかった……

………ここ。

………んこ。

………蓮子!!

「………??」

「むあ………?」

そうして、少女は目を覚ます。